
学生の主体性を育む、教育方法と教材の検討

— 「現代社会の諸問題：東アジアの未来」を素材として

研究代表者 奥野恒久（政策学部）
共同研究者 中田裕子（農学部）
田口律男（経済学部）
松浦さと子（政策学部）
妻木進吾（経営学部）
手嶋泰伸（文学部）
藤原崇人（文学部）

1. はじめに

学生を、ただ教わる「客体」としてではなく、自分の考えや価値をもって、ときに社会の問題を自身の問題としてとらえ、行動できる「主体」として育みたい。そのために大学での教養教育には何ができるのか。教養教育はどうあるべきなのか。この問いに向き合おうとしたのが、本プロジェクトである。

複数の教員がオンラインで、グループディスカッションを取り入れながら行う「現代社会の諸問題：東アジアの未来」を素材に進めてきた本プロジェクトであるが、一つの難点として痛感するのが、学生間の知識の差である。たとえば、「日本の戦争への道」を取り上げ、衣服を中心に当時の国民生活を問題にグループディスカッションをしても、国家総動員体制についての知識がなければディスカッション自体が難しくなる。そこで、事前に学習できる教材、すなわち教科書の共同作成を試みたいと考えてきた。ところがこれについては、多くの研究員があまりにも多忙であることから今年度については見送らざるを得なかった。次に、学生たちがよりリアルに東アジアの問題を理解するために、海外の学生や研究者とオンラインで接する機会をつくることを追求し、これについては一部実現することができた。

本プロジェクトは本年度が最終年度ということもあり、3年間の活動も視野に入れながら、2023年度の成果と課題を報告する。

2. 2023年度の活動内容

(1) 3回開催した研究会

①2023年7月19日 第1回研究会（和顔館 214 教室）

メンバーの自己紹介を行ったうえで、本プロジェクトの意図について奥野が説明し、意見交換を行った。

戦争責任や、歴史との向き合い方は、学生と対話を行う上でも非常に難しい問題である。そこで、ドイツから示唆を得ようと、ドイツでこの問題についても取材経験がある、岸本文利氏（社会学部）に「歴史との向き合い方—ドイツでの取材経験を通して」という報告をしていただき、議論を行った。メディア取材や日本の政治状況など広範な内容で、議論がなされた。

また、教科書作成についても議論を行った。

②2023年8月31日 第2回研究会（和顔館 5階会議室）

後期から開講される授業での奥野担当回を意識して、奥野恒久が「日本国憲法の平和主義—『東アジアの未来』の授業を意識して」との報告を行い、授業のイメージも含

めて議論を行った。戦争など現実に生じている問題とはいえ、学生が自身に引きつけにくい問題をどう扱うか、という論点が提起された。

また、授業の全体構成について意見交換を行った。

③2023 年 1 月 26 日 第 3 回研究会（和顔館 5 階会議室）

後期授業を終えて、中田裕子の「オンライン授業におけるグループ討論について」とのテーマでの報告を受けて、オンライン授業でいかにディスカッションを活性化させるかにつき、意見交換を行った。グループごとに討論シートを作成してもらうのは有効だと言えよう。また、グループディスカッションをする授業として果たしてオンラインが適切なのかという問題についても、意見交換を行った。

教科書作成についても議論をしたところ、研究員が現在多忙すぎるということで、「先に延ばす」ことを決めた。また、2 月 20 日に開催される圓光大学東北人文社会研究所との学術大会に向けて打ち合わせを行った。

（2）韓国との研究交流

①2023 年 5 月 31 日～6 月 3 日の韓国出張

「安重根東洋平和研究センター」が共催で行った、韓国の圓光大学東北アジア人文社会研究所との日韓学術大会（6 月 1 日）と安重根義士記念館での学術会議（6 月 2 日）に、奥野と田口が参加し、6 月 2 日に田口律男が「日本人作家の安重根評価—夏目漱石『門』を中心に」とのテーマで発表をし、奥野恒久が「日本の憲法学における平和主義論—安重根『東洋平和論』との架橋の可能性」とのテーマで報告を行った。

この出張を通じて、韓国の研究者と有意義なネットワークを形成することができた。

②2024 年 2 月 20 日の学術大会（龍谷大学大宮キャンパス）

「安重根東洋平和研究センター」が共催で行った、韓国の圓光大学東北アジア人文社会研究所との日韓学術大会にて、複数の研究員が参加した。田口律男は「ハルビン事件をめぐる夏目漱石周辺の言説傾向」とのテーマで報告を行った。また、藤原崇人は金賢珠の「安重根の遺墨からみた儒家思想と平和精神」との報告に対し、松浦さと子は尹在敏の「安重根という想像力：1980 年代以降の韓国の小説と映画を中心に」との報告に対し、討論者として問題を提起した。

学術大会終了後の懇親会でも、映画『福田村事件』を題材に議論がなされるなど、韓国の研究者と貴重な研究交流を行うことができた。今後の貴重な財産になるものと確信する。

（3）2024 年 3 月 3 日開催の安全保障政策をめぐるシンポジウムに参加

2024 年 3 月 3 日に慶應義塾大学三田キャンパスで開催された、全国憲法研究会憲法問題特別委員会の公開シンポジウム「戦後安全保障政策の大転換と憲法 9 条」に奥野が参加し、安全保障政策をめぐる最新の知見を得てきた。とりわけ、遠藤乾（東京大学）の「今日のウクライナは明日の東アジアか—日本の安全保障を再検討する」との報告は示唆に富むものであった。討論時に、「台湾有事」への対応につき奥野も質問をし、有意義な応答を得ることができた。

なお、せっかくの東京行の機会ゆえに、3 月 3 日の午前中に、本授業でも扱う、靖国神社とそれとの対比で扱う千鳥ヶ淵戦没者御苑を訪問した。

3. 本プロジェクトの成果

(1) 授業の全体構成の確立

- 1 回：イントロダクション（奥野、中田）
- 2 回：龍谷大学所蔵大谷コレクションと東アジア（村岡）
- 3 回：20 世紀初頭の東アジア（中田）
- 4 回：安重根と浄土真宗僧侶とのかかわり（奥野、ゲスト・平田）
- 5 回：近代日本文学と東アジアの関係（田口）
- 6 回：日本の戦争への道（井内）
- 7 回：台湾問題—歴史を中心に（中田）
- 8 回：沖縄の歴史と現在（松島）
- 9 回：靖国問題（奥野）
- 10 回：戦争責任をめぐる日本とドイツ（岸本）
- 11 回：ヘイトスピーチ問題（妻木）
- 12 回：東アジアをめぐる国際関係（八幡）
- 13 回：日本国憲法の平和主義（奥野）
- 14 回：東アジアの平和状態の創生に向けて—非武装中立という選択肢（重本）
- 15 回：TBL 実践（まとめの討論）（奥野、中田）

ここ 3 年の授業実践と、FD 研究での議論を通じて、授業のおおよその全体構成は上記の通り確立したといえる。まずは、東アジアの問題を学生たちが近くに引き寄せるよう、本学が所蔵する安重根の遺墨と混一疆理歴代国都之図などを紹介する。次いで、それらを手がかりに 20 世紀初頭の東アジアと日本の歴史を概観する。とりわけ、朝鮮半島の植民地支配と台湾問題、沖縄問題に立ち入る。歴史に力点を置いた前半を終えた段階で、中間レポートを課す。

後半は、靖国問題、戦争責任問題、ヘイトスピーチ問題といった今日においても論争的な問題を取り上げ、台湾・中国を中心に東アジアの国際関係を取り上げる。最後に、東アジアの未来に向けて日本は、私たちは何ができるかという問題意識のもと、日本国憲法の平和主義と、非武装中立という選択肢を提起し、受講生に考えてもらう。そして最終レポートとして、「東アジアの未来への提言」をまとめてもらう。

もちろん、今後、修正を加えながら発展させていくものだが、全体構成の原型が確立した、すなわち何をどのような順序で語っていくかにつきおおよその回答を出せたことは成果といえよう。

(2) 主体性と思考力を育む

学生たちのレポートを読むと、学生たちがこの講義を通じて立ち止まって考えたことが伺われる。たとえば、「東アジアの平和を実現、そして維持していくためには、日本が非軍事的安全保障による国家間の信頼関係を構築する先駆者とならなければならない。……軍事力の強化は、東アジア諸国の信頼を失い、不信感を抱かせ、国家同士が軍事的な手段によって自国の安全を守ろうとする流れを加速させてしまうだろう。」「日本は防衛力を強化して対立を深めるよりも、寄り添うような外交が必要ではないかと考える。例えば、沖縄の平和の礎のように太平洋戦争で亡くなった人々を弔うような施設を作るといったことだ。太平洋戦争では日本人だけではなく、多くの東アジアの人々が亡くなった。ドイツでは戦争責任への向き合いが重視されている一方で、日本ではそう言ったことがあまりされていないという。そのため戦没者全員を弔うような施設を作り、戦争責任に向き合い、寄り添うような姿勢を見せるべきだと考える。」など、立ち止まって考えたとき、戦争に批判的になるのは若い学生にとっても当然のことかもしれない。ただ立ち止まって考える、

あるいは国際的な問題や戦争の問題について話し合う機会が少ないことが問題であろう。ささやかではあるが、そのような機会をつくれていることは成果だと言えよう。

主体性という点では、様々なアイデアも学生から出された。SNS を通じてというものが多かったが、斬新かつ実現可能性のあるものも多く、その具体化が望まれる。また、スポーツや芸術での交流など、自身の活動を活用しての提言も見られた。

(3) 海外との交流

2023 年度の授業では、最終回にソウルにある安重根義士記念館の柳永烈館長と李惠筠事務局長がオンラインで参加して下さり、韓国にて安重根がどのように理解されているかにつき語ってくださった。安重根については複数回、授業でも取り上げていたこともあり、韓国での認識につき直接お話を聞いたことは、少なくとも人物評価は多面的であり見方が違うと正反対に見えることもあると実感したであろう。他者や異文化につき、自身の物差しで測って断じてはいけないことを感じたかもしれない。大きな成果であった。

本授業を終えての学生からのレポートに、大切なことは「自国以外の歴史や、文化、民族性等をきちんと知っておくことである。戦争は政治家が起こすものではなく民衆が支持することで起こるものである、それを回避するためには他国について詳しく知っておくことである。そしてそれを違いとして受け入れる寛容性を持つことである」というものがあつた。

今後は、圓光大学の研究者や学生とも、さらに一定のやり取りができるようになれば、と考える。

4. 今後の課題

(1) オンラインがいいのか、対面がいいのか？

オンラインでのグループディスカッションはなかなか難しい。しかも、難解なテーマだけに発言すること自体に抵抗感を抱く学生も相当いるであろう。それでも、自身の振舞い方等を工夫した学生もいたし、受容した知識や情報を活用した学生も多く、一定の教育効果はあつたといえる。何よりも、韓国からゲストに話してもらおうといったことはオンラインゆえにできることである。

ただ、ディスカッションのレベルは、グループによって相当の差があり、表層的なやり取りしかできていないグループもしばしばみられた。ディスカッションのレベルという点ではやはり対面の方が効果的であろう。グループディスカッションの進め方やグループ内での役割分担などをもう少し指導を徹底する必要がある。当面はオンライン授業を継続するとしても、対面に改めることの是非については、一度じっくり検討した方がいいであろう。

(2) 学生間の「温度差」にどう対応するか？

昨年度この授業を振り返って、「本授業に『合う学生』と『合わない学生』の差が如実にあらわれた」と総括した。2023 年度の授業にあたっては、「この授業は力をつく授業であるが、大変な授業である」とシラバスにも記したし、初回の授業でも強調した。そのため一定の改善は見られたが、それでも合格率は低い。受講者の多かった文学部で、S 評価は 0%、A が 11%、B が 25%、C が 16% 的で、不合格が 38% であつた。政策学部で S が 2%、A が 21%、B が 34%、C が 10% で、不合格が 26% であつた。やはり厳しい科目といえよう。

事前準備を行うための教科書作成は「先送り」することにしたが、事前に資料やレジュメ、さらにディスカッションのテーマを示すことで、不安を抱いている受講生の授業への

ハードルを多少なりとも下げることができるであろう。また、昨年度以来「課題」だとしても徹底できなかった、学生への丁寧なフィードバックをやはり試みなければならない。

おわりに

本プロジェクトは、「龍谷大学は、教養教育が面白い」と言われるような講義を生み出したい、との思いから進めてきた。2021 年度、プロジェクト開始時に掲げていた課題は、以下の三つであった。①どのような知識・情報を提供すべきか、その順序はどうあるべきかを検討する。②学生たちには、どのような問題を問いかけるのが適切かを検討する。③ただ一方通行の講義ではなく学生同士が意見交換を行い、考えを深めるには、いかなる手法があるかを検討する。その際、オンライン授業を活用することが有益なのか、さらには将来的に深草と瀬田との同時開講も可能なのかも検討する。

これら三つの課題については、3 年間の教育実践と本プロジェクトを通じて応えることができたと考える。2024 年度からは、瀬田学舎でも授業を開講することとなった。教科書作成は実現できなかったが、また改めて実現に向けて検討したい。